

平成 29 年度 学術振興基金助成による成果報告書

平成 30 年 5 月 22 日

学 長 殿

所属部局・職名 行政政策学類・准教授

申 請 者 名 新藤 雄介

助成事業の区分 (該当するものに印)	研究協力に関する事業 (学術出版・叢書・学会等運営・ <u>学会参加</u>) 学術振興に関する事業 (学生・事務職員・その他の特別事業)
事業名	日本出版学会 2017 年度秋季研究発表会
事業実施期間	平成 29 年 12 月 1 日 ~ 平成 29 年 12 月 2 日
成果の概要	<p>1. 『文芸戦線』内部からの理論批判 プロレタリア文学雑誌『文芸戦線』の同人であった中西伊之助は、『文芸戦線』1926 年 8 月号で、マルクス主義者たちが現実を見ずに概念的になっているとして、マルクス主義者の水野正次を批判した。これに対して、水野からの反論と、中西からの再批判が行われた。こうした理論偏重への批判は、読者からも寄せられていた。</p> <p>2. 『農民自治』の反理論 大正 15 (1926) 年 4 月、中西伊之助・渋谷定輔らが農民自治会を設立し、農民による農民のための運動を開始する。農民自治会の会員は、理論をそのまま信じてはいけないう、理論が現実を捉えられていないとして、反理論的態度が形成されていた。</p> <p>3. 反都会主義のすれ違い 農民自治会では、機関誌『農民自治』の創刊号に標語の 1 つとして、反都会主義を掲げた。そのため、中西伊之助は『文芸戦線』1926 年 7 月号で、農民が地主と都会による二重の搾取を受けていると主張した。しかし、会のこうした反都会主義は、『文芸戦線』からは理解されることがなかった。</p> <p>4. 反理論の理論 『農民自治』1928 年 4 月号で鎌田研一は、マルクスやエンゲルスの理論を否定しつつ、農民の生活実感を理論化することを主張した。農民自治会は、組織改編を行うこととなり、研究部を設立し、理論重視の方向へと転換していくことになった。</p> <p>5. 本発表の射程と知見 当時の反理論的態度は、『文芸戦線』から派生した『戦旗』でも生じており、読者は難解な内容に消化不良を起こしていた。こうした状況に対して、編集部や一部執筆者は気付いており、一般大衆を置き去りにしていることに危機感を抱いていた。</p>